



やさしく かしく たくましく

「元気と笑顔」のある学校

学校だより NO.6
令和6年8月28日
多治見市立池田小学校
TEL: 0572(22)0883

39日間の「自分でつくる夏休み」が終わりました。昨年以上に、真夏日や猛暑日が続く、暑い（熱い）夏でした。

今年の夏は、フランスのパリでオリンピックが開催され、連日選手たちの熱い戦いが繰り広げられました。多くの日本の選手が活躍する姿を見ることができました。報道によって、選手の活躍はもちろん、各国のメダルの獲得数や、入賞数、勝敗数が伝えられ、国内外で盛り上がりました。しかし胸を打たれるのは、やはり、様々なプレッシャーを感じながらも、最後の最後まであきらめずに勝利を目指して正々堂々と戦う姿。自分が納得する結果や記録が得られなくても現状を受け入れ気持ちを切り替え、次へ進んでいく選手の言葉や姿。各競技の奥深さや醍醐味、あるいは新しい競技のおもしろさを感じることができました。

さて、夏休み明けの「池田っ子」というと、久しぶりに会った仲間や担任の先生と夏休みの出来事について楽しそうに話していました。また、夏休みの一研究一作品の発表では「こんな工夫をしたよ」「ここが難しかったよ」や「ここはどうなっているの?」という子供たちの声がありました。

そんな子供たちの姿から、「自分でつくる夏休み」で掲げた2つのポイント「命や健康を大切にすること」と「夏休みの自分の宝物をつくる」について、多くの子供たちがやり遂げられたのではないかと感じています。保護者の皆様の適切な支えや声かけがあったからこそと思います。ありがとうございました。

実りある4か月にするために

夏休み明けの集会で、これからの4か月間が、自分の力を大いに伸ばすことができる期間であることを話し、3つのポイントを示しました。



1. まず、学校生活のリズムを取り戻す

学校はたくさんの仲間と生活をし、授業や活動をしていきます。学校生活での約束や一日の過ごし方を含めた、学校生活のリズムがあります。そのリズムを1日も早く取り戻し、仲間の中でも自分のよさや力が発揮できる基盤を整えることが必要です。まず、**挨拶や時間、集団のルールを守ることを意識した行動**をすることです。また、9月はまだまだ暑い日が続く、日もだんだん短くなってきます。体調を崩しやすいです。「命や健康を自分で守る」ためにも、**家庭での食事や睡眠**などを大切にしましょう。

2. 授業や行事で、自分のよさを生かす

夏休みだからこそできることに挑戦し、自分の頑張りやよさを増やすことができました。新たな興味関心を見つけたり、知識や体験を深めたり、自分の気持ちをコントロールすることを覚えたりしたはず。その知識や体験を通して得た**自分のよさを学校の授業や行事でこそ発揮**してほしいです。「まず、やってみよう。次こそもっと」の気持ちで、自分を高めるために**全力で粘り強く取り組んで**みましょう。

3. 仲間との活動を大切に

宿泊研修や社会見学、外部講師との授業など多くの行事があります。それらの行事を充実させ、楽しくするためには、仲間との活動を大切にすることです。大切にすると次のような実りがあります。

- 自分とのちがいがわかり、仲間の気持ちを考えて行動できる。
- 仲間の支えは何よりうれしいし、安心して力を出すことができる。
- 仲間のために頑張ると、相手から認められれば、自分の自信につながる。
- 頑張っている仲間を応援すると、仲間もより力を発揮できるようになり、一緒に充実感を味わえる。



7月実施の「学校アンケート」の集計結果から、子供たちの主体性や自己有用感、共生力を育てていく必要があると感じています。多くの人や事象と関わる中で自分のよさに気づき、そのよさを生かすことが効果的です。様々な行事も含めて学校における日々の授業や活動にその機会があります。ですが、学校だけの取組や指導で、一朝一夕に子供たちの中に育っていく力ではありません。

また、7月末に新聞等で発表された全国学力学習状況調査の結果によると、**ゲームやSNSなどの情報端末の利用時間が長いほど学力が低い傾向にある**ことが示されています。

子供たちの人間関係や心を健やかに育て、確かな学力を身に付けていくには、まわりの大人の温かな支えと理解が不可欠です。夏休み明けからも、学校の教育活動への温かいご理解とご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

<親育ちコーナー>

相談してみよう 少しずつでも、きっと何かが変わるから①

親育ち4363たじみプラン事務局

夏休みが終わりました。毎年、この時期には子どもの心の不安が話題になります。

「つらいときにはいつでも相談するんだよ。いつでもどこでも待っているよ」

子どもたちの心を守るために、日常的に、とりわけ夏休みなど、長期休業の前後には、日本中のすべての学校で、教室で、子どもたちに、シャワーのように伝えられている言葉だと思います。

「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」(文部科学省)の中で「休みたいと感じ始めてから実際に休み始めるまでの間に相談した相手」が問われています。「家族」と回答した子が小学校で53.4%、中学校で45.0%と、共に最も高い割合でした。一方で、「誰にも相談しなかった」割合が小学校で35.9%、中学校では41.7%と、共にこの設問では二番目の高さです。

私たちは、両腕を大きく広げて待ち受けています。しかし、「つらさや悩みを誰かに相談する」ということは、私たちが思う以上に、子どもたちにとってはハードルが高いようです。このことは、私たちに何を示唆しているのでしょうか。

(教育推進課 家庭教育担当)